

## アメリカ社会進化論で読む『お国の慣習』

木 戸 美 幸

### はじめに

ジョセフ・キャロル (Joseph Carroll) の指摘するように、十数年来、文学作品の社会進化論的読み直しが進んでいる (Carroll 152) が、たとえばバート・ベンダー (Bert Bender) は、自然淘汰という観念には、性差に関する偏見が内在する点に焦点をあてた上で、社会進化論的視座がアメリカの社会生活にもたらした負の面を描いた作家の一人として、イーディス・ウォートン (Edith Wharton) の名を挙げている (Bender 32)。ウォートンが1913年に出版した『お国の慣習』 (*The Custom of the Country*) は、伝統的価値観に縛られる人々対新しい生き方で社会の階段を駆け上る人々の攻防を描いた点で、社会進化論に対する作者の考えが指摘される作品である (Ohler 89-138)。

この拙論では、まず、進化論、さらに社会進化論とは、それぞれどのような考えで、どのように誕生し、どのように社会に受け入れられていったのかを明らかにした上で、「進化」とは新しい環境への適応力によって遂げられた、との観点に立って『お国の慣習』を読み直したい。作品中何度も新しい環境に身をおき、そのたびに苦杯を喫しながらも、なんとか自分の望むものを手にいれるアンディーン・スブラッグ (Undine Spragg) は、さしずめ社会進化論の体現者である。だが、彼女が窮地に立ったとき、必ず救いの手をさしのべるのが、彼女の初婚相手エルマー・モファット (Elmer Moffatt) であることを指摘することによって、『お国の慣習』におけるエルマーの重要性を再考する。美貌を資本に望むものを手にするアンディーンに対し、エルマーは時代の動きを読みとる才覚を元手に、巨万の富を獲得していく点で、まさに社会進化論のモデ

ルとして描かれていることを示しつつ、ウォートンが作品にこめた意図を明らかにしたい。

### 1-1 「進化論」誕生

イギリスの博物学者チャールズ・ダーウィン (Charles Robert Darwin) が、『自然淘汰または生存競争における優性種の生き残りによる、種の起源論』(*On the Origin of Species by Means of Natural Selection, Or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*) をロンドンにおいて出版したのは、1859年のことであった。この名著が、これまでに書かれたもっとも偉大な科学書の一冊であるとの評価は、21世紀を迎えた現在でも変わらない。しかし、キリスト教が人々の精神・社会生活に、現代よりもっと大きな力をもっていた出版当時、神の力の否定にもつながりうるこの科学書は、いかにして誕生し、どのように受けとめられ、またその後、どのような影響を与えたのであろうか。

人類の知の財産は、ほとんどの場合、過去の歴史や、時代背景や、社会に生きて多くの人々から、さまざまな影響を受けて生みだされるものである。ジャネット・ブラウン (Janet Browne) は、ダーウィンの考えが『種の起源論』という大著に結実するまでに、彼に大きな影響力を与えた著作として、特に以下の5冊を挙げている (Browne 16-45)。

ダーウィンがケンブリッジ大学在学中に読んだ、英国国教会大執事ウィリアム・ペイリー (Archdeacon William Paley) の『自然神学』(*Natural Theology*1802年) は、生物が環境に適応している点に、完璧な設計者としての神の力を見ていた (Browne 17)。ペイリーのこの視点は、奇跡を起こす絶対的存在というより、人間社会や自然界のすべてが効果的に動くように采配をふるう全能者として神を受け入れていた、19世紀初期イギリス人の大多数に支持されていた。後にダーウィンは、設計者としての神という考えを捨てることにはなるが、ペイリーの明確な議論を、終生崇拜した、という。

ダーウィンは海軍の調査船ビーグル号に乗りこみ、1831年から1836年にかけて世界を周航した。その航海中に読んだ、チャールズ・ライエル (Charles

Lyell) の『地質学原理』(*The Principles of Geology* 1830～1833年)は、神の命に従って誕生した地球は、人間が住める場所として、神のシナリオに沿った段階を踏まえて進歩してきた、との説に異を唱えた点で、聖書の権威を拒否するものであった。地球の表面に各段階を示す証拠はなく、むしろ、たえず無数の小さな変化をくりかえしながら、地球は永遠に存在し続ける、とライエルは主張した (Browne 30-1)。ただし、彼は地球の漸進主義は唱えても、そこに住む生物の変遷を認めることはなかった。

ダーウィンが航海を終えて帰国後に読んだ、ジャン・バティスト・ラマルク (Jean-Baptiste Lamarck) と、自身の祖父イラズマス・ダーウィン (Erasmus Darwin) の、それぞれの著作物は、動植物が無機物から自然発生した後、異なる環境に適應することで多様化してきた、と述べた点で、ダーウィンの注目を集めた (Browne 37)。この説は、ダーウィンの思索に大きな影響を与えたが、では動植物が実際にどのように変化したか、というさらなる問いを、彼に突きつけることとなる。その解答のヒントを得たのは、1838年に読んだトマス・マルサス (Thomas Robert Malthus) の『人口論』(*An Essay on the Principle of Population* 1798年)であった。マルサスは社会の自然法則を合理的に分析した結果、常に増加する人間に食料生産は追いつかないものの、社会でもっとも貧しく、健康に恵まれない、弱き人々が人口の調整役を果たしている、という。したがって、このような弱者に慈善を施せば、自然な人口減少はかなわず、さらなる食料の欠乏をもたらす、とマルサスは論理を展開していたのである (Browne 43-4)。

当時のイギリスは、ヴィクトリア朝時代 (1837～1901年) が幕を開け、産業技術の進歩と経済発展が誰の目にも明らかであり、「進歩」と「繁栄」が時代を表す精神となっていた。このような社会的状況は、必然的に人々の価値観や生き方をも急激に変えた。奇跡的な神の力や、聖書の世界、教義に基づく教会の権威が、日常生活の劇的変化を説明するのに力及ばなかったのは、たとえばダーウィンの注目をひいた上記のような著作物が出版され、読者を得ていたことから明白であろう。人間や社会に対する新たな洞察が受け入れられる土

壤は整いつつあったのだ。

ダーウィンが上記著作物の影響を受け、さらに5年に及ぶ航海中に発見した多様な自然や動植物の観察結果を基に、「自然淘汰」(natural selection)という考えに至ったのも、まさしくこのようなイギリス社会の大変化のさなかに生きていたからにちがいない。自然界には生存のための闘いがあり、もっとも弱き生物が死に、より適応した個体が残って子孫を産み、そのくりかえしによって生物は環境により適応し、「進化」(evolution)を遂げていく、との考えである。この考えの本質は、生物が神によって創造されたのではなく、自然の進展の産物だという点にあった。彼の論理に、競争と自由市場の資本主義システムを見ぬいたカール・マルクス(Karl Marx)の例が示すように、生物間においてと同様、国家間や人種間や男女間においても、生存をめぐる闘争があると示唆した点で、ダーウィンの進化論はその後、社会のあり方に大きな影響を及ぼしていくのである。

## 1-2 「社会進化論」への応用

1850年代には、進歩的な思想家たちの多くが、信仰との矛盾を意識することなく、社会における種の変遷を受け入れていった。自助努力による進歩、経済的發展、文明の発達は、一連の自明の理となった。

ダーウィンが『種の起源論』で用いた「自然淘汰」は、資源も場所も限定されている自然界において、生存のために引きおこされる闘争を意味するための用語であった。この考え方をさらに押しすすめ、1864年に「適者生存」(the survival of the fittest)という造語を生みだして、人間社会での競争を説明したのは、イギリスの哲学者ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)である(Galbraith 48)。彼は、人間社会には自然の法則が組みこまれているとして、動植物の進歩の法則を、人間社会の政治、経済、産業技術の発展にあてはめた。人間社会のあらゆる闘争は、「発展」に至るための原動力として正当化されたのである。ジャネット・ブラウンによれば、ダーウィン自身はスペンサーの著作物をまじめに受けとめたことは一度もない(Browne 64)、という。自由主

義経済のヴィクトリア朝資本主義は、競争原理の上に成り立っていたのであり、イギリス社会が選択した社会経済政策、植民地獲得を柱とする政治政策は、社会進化論にその論拠を求めた。しかし同時に社会進化論は、階級格差、人種差別、性差別など、あらゆる闘争の種を内包しており、ゆきすぎの競争がもたらす個人主義の弊害が指摘されるようになるのは、20世紀を迎えてからである。

### 1-3 アメリカにおける「社会進化論」

アメリカの歴史家リチャード・ホフスタッター (Richard Hofstadter) は、19世紀最後の30年間および20世紀初頭にかけてのアメリカ社会では、進化論の影響力が圧倒的であり、社会進化論を唱えたスペンサーは、アメリカでの評判が本国イギリスにおけるよりはるかに高かった (Hofstadter 5)、と述べている。この時代のアメリカは、南北戦争 (1861～1865年) 終結後で産業文化の拡張期を迎えており、急激な経済発展を遂げつつあった。スペンサーの社会進化論を信奉し、強者必勝を地で行った実業家には、鉄鋼王アンドリュー・カーネギー (Andrew Carnegie 1835～1919年)、金融王 J・P・モーガン (J.P. Morgan 1837～1913年)、鉄道王ジェームズ・ヒル (James Jerome Hill 1838～1916年)、石油王ジョン・ロックフェラー (John Davison Rockefeller 1839～1937年) といった、アメリカ産業発展の立役者たちがいる。彼らは、最強で効率のよい組織が市場を独占するのは、自然の法則にかなっており、市場独占はアメリカ経済の発展に寄与できる、と自負していた。

革新的なアメリカ社会進化論の擁護者たちは、政治上の放任主義を主張する保守主義者でもあった。マルサスの論理と同様、社会的弱者の救済は、生存に適していない人間や組織を増やすことになり、社会的経済的発展を阻害し、ひいては国に不利益をもたらすと考えられた。したがってアメリカ政府による国民への積極的関与は、むしろ最小限に抑えられるべきとの、無政府主義的思想が歓迎されたのである。

しかし、生存競争を勝ちぬき、成功の証として巨万の富を手にした資産家たちは、まさに競争文明の花として社会に君臨した一方、アメリカ社会は、本質

的に利己的で攻撃的である彼らが引きおこすさまざまな問題と対峙せざるをえなかった。社会進化論の行きつく先はここであった。市場経済化と競争激化は必然的に物質主義、拝金主義をもたらし、道德規範は低下し、人々の精神は荒廃した。アメリカ社会進化論信仰の終焉が近づいていた。ホフスタッターによれば、「アメリカにおけるスペンサーの流行のピークはおそらく1882年の秋」(Hofstadter 48)であり、彼に関心を持つ者さえ、もうめったにいない、とある宗教思想家が1917年に述べた挿話をホフスタッターは引用している(同49)。生存競争に敗れた社会的弱者は、なすすべもなく、アメリカ社会の底辺に沈んだ。倫理観の荒廃は、社会のさまざまな面で問題を引きおこしていた。19世紀後半のアメリカ社会に社会進化論がもたらしたものは、社会の多くを犠牲にした一部の個人だけの物質的豊かさであった。社会全体を豊かにするためには、個人だけではなく、政府も相応の役割を果たさなければならない。1929年の大恐慌を経て、1930年代のアメリカが、ニューディール政策のもとで混合経済と福祉国家への道を歩みはじめたのは、人間主義の社会をつくるために大きな政府が必要であることを、人々が身をもって学んだ後であった。

## 2 アメリカ社会進化論で読む『お国の慣習』

次に『お国の慣習』が描くアンディーン・スプラッグの半生を、エルマー・モファットとの関わりにおいて読む。全594ページ、46章から成るこの作品中、年代が明確に特定されるのは、22章でアンディーンの子アブナー (Abner) が義理の息子ラルフ・マーヴェル (Ralph Marvell) にダコタが連邦に編入した年について口にした時のみである。史実では1889年11月のことで、作品の描く約10年間のアンディーンとの婚姻関係を中心に年代を計算すると、作品の舞台は20世紀を迎えるまでの10年間ほどと推測されるので、アメリカでの社会進化論全盛期とほぼ重複する。ポール・J・オラー (Paul J. Ohler) の指摘するように、ウォートンは、ダーウィンによる生物学上の進化論を人間の行動や文化に適用した社会進化論的立場で、急激な経済発展を遂げつつあるアメリ

カ社会を考察した (Ohler xvi)。自然界において、動植物が適応しようと闘うのが「環境」であるのに対し、『お国の慣習』において、中西部アペックス出身の美女アンディーンが適応しようと闘うのは、結婚によって身をおいた「異文化」であった。同じ価値観を共有するエルマーとの一度目と四度目の結婚を除いて、ニューヨーク伝統の上流階級に属するラルフ・マーヴェルとの二度目の結婚も、フランス貴族レイモン・ドウ・シェル (Raymond de Chelles) との三度目の結婚も、次々と破局を迎えたのは、アンディーンが、夫と夫一族の慣習の背後にある価値観や思考様式など、心意に関わることを理解をしようとしなかったからである。ただし、その際、「異文化」に適応できず心身ともに回復不能なほど傷つくのは、アンディーンではなく、彼女を妻としたラルフでありレイモンであり、さらにラルフとの間に産んだ長男ポール (Paul) である点は、注目に値する。ラルフ、続くシェルとの結婚生活における、幾度もの危機脱出の機会を彼女に与えるのは、決まってエルマーであることから、この作品における彼の役割はもっと重要視されてよい。紆余曲折を経て作品の最後で、再度結ばれるアンディーンとエルマーの軌跡を中心に追いながら、社会進化論的勝者として生きぬく二人の姿を描こうとしたウォートンの意図を明らかにしたい。

## 2-1 アンディーンとエルマーの初婚

『お国の慣習』は、中西部の架空の町アペックスから両親と共にニューヨークに移り住んで二年になる美女アンディーン・スブラッグが、挫折を抱えた状況にいる描写で始まる。彼女の挫折の原因は、ニューヨーク上流社会とのパイプがいまだに作れず、したがって最終目的である結婚相手との出会いすら果たせていないことである。高級ホテル住まいをするスブラッグ家の家計は、相場師である父親アブナーが担っており、母親レオタ (Leota) と一人娘アンディーンは、ひたすら運命の出会いを待つ日々を送っている。父親の職業、家族の移住目的と居住形態は、スブラッグ家が社会進化論的勝者の側に立っていることを示唆する設定である。

だれもが感嘆するほどの美貌を備えたこの娘は、ニューヨークに来て早くも最初の冬には、ポーランド人馬術教官との婚約騒動をおこしている。この男性は国籍をオーストリアと偽ったばかりか、詐欺の嫌疑をかけられ母国から逃亡してきたが、虚構の貴族夫人との熱愛話で、いとも簡単にアンディーンをだました人物である。この騒動から一年が過ぎても、アンディーンが運動不足解消のため乗馬に出かけるだけで、スブラッグ夫妻の不安が募るのだが、実はアンディーンの過去は、同類の、陳腐で軽率な恋愛騒動の連続であった、といってもよい。さらに言えば、『お国の慣習』自体が、アンディーンの半生にわたる、身勝手だが精力的で、社会的上昇志向に満ちた、恋愛遍歴の書なのである。

作品中、アンディーンの恋愛に関する描写を拾うと、十代の夏、避暑に出かけたヴァージニア州ポタッシュ温泉地での歯科医の助手との恋に始まり、故郷での二年間に及んだ、薬局の店員ミラード・ピンチ (Millard Binch) との婚約が続く。それが破棄に至ったのは、アベックスに突然現れ、アンディーンの幼なじみインディアナ・フラスク (Indiana Frusk) の兄が彼女に引きあわせたエルマー・モファットとの出会いが原因であった。変化の少ない中西部の小さな田舎町に、突然出現した若者は、大半の若い娘たちの気分を高揚したにちがいない。また、それだからこそ、アンディーンの獲得本能が刺激されたのである。

アンディーンは、自分の美しさを最強の元手として、「最高のものが欲しい」(『お国の慣習』24) との「社会的野望」(22) に燃えており、「彼女のように多くを恵まれた者には、人生の特権は公然と入手されるべき」(234) だと確信している。しかし、「より良くなることだけを望んでいる」(52) ため、常に自分が得たものと他者が持てるものとの比較をするはめに陥り、その当然の帰結として、相対的価値観は揺らぎ、さらに望むものがエスカレートしていく。アンディーンが、いとも簡単に落ちた恋から身をひくのは、決まって他者(第三者あるいは次に恋人となる人物)によって、現在の恋人が矮小化された場合である。相手に対する深い理解に基づく信頼や愛情のないまま、自分を楽しませ、際立たせてくれる人物を選ぶため、別の人物が現れると、比較の結果、現時点



での恋人の相対評価は下がり、さらなる愉悦を求め、躊躇なく相手を変えてしまう。アンディーンにとって、恋人は、常時取り替え可能な装飾品以上の意味をもたないのである。したがって、どの恋人の場合も、相手の外見描写に多くの行数がさかれることになる。だが、見方を変えれば、自分がより生きやすい環境を求めて、変化を求め続けるのは、まさにたくましい進化論的生き方といえるのではなかろうか。そしてアンディーンにとって、より生きやすい環境とは、なによりも、彼女のあくことなき消費欲を満たすだけの資産が存分に用意された生活でなければならない。

スプラッグ夫妻が娘のいない場所で密かに交わす、1章での会話に登場させることによって、その存在が無視できない重要人物としてエルマーに注目するよう、読者は作品の始めからしむけられる。他方、彼に関する説明は、赤ら顔で肥満気味の外見から、粗野なマナー、飾りすぎた服装に至るまで（無一文の風来人としてアベックスに現れた過去から、全米有数の資産家になった時点まで）、一貫して否定的に語られるのが特徴である。彼とアンディーンがかつて結婚していた衝撃の事実は、二人が人目を盗んで再会した9章での対話によって示唆され、35章で偶然エルマーの口からラルフに明かされるものの、二人の結婚に至る詳細は、作品の後半43章でやっと説明される。つまり、アンディーンとエルマーの結婚は、この作品の伏線として敷かれているわけである。ところが作品中では、エルマーの出身地や生育歴、学歴、家族など、彼を知る手がかりはまったく与えられない。血縁・地縁にがんじがらめにされた、ラルフやレイモンとは対照的で、本能だけを手がかりに、生き馬の目を抜く成り上がり者に関しては、その個人的背景を語る必要がない、とのウォートンの思いが伝わるようでもある。

アベックス滞在中、エルマーは、小さな田舎町を覆っている外面だけの信仰心や道徳律に挑み、常識やぶりの行動で人々の反感を買う。ただし、政治力学、経済、社会が連動するからくりについて、モデルケースとして観察し、学ぶには、おそらく激動のアメリカ社会にあって、大開発の目が向けられはじめていた中西部の小さな町こそ最適だ、と判断したからこそ、彼はアベックスにやって来

たにちがいない。利に聡いエルマーの、鋭く動物的な察知力は、この後の成り上がりぶりにいかに発揮される。若くて深慮もないものの、「彼と一体化したいという、本質的、本能的願望」(568)を抱いたアンディーンの描写にも、生存競争に勝つための本能ともいうべき力を感じる。二人はネブラスカ州オパークへ逃亡し結婚するものの、二週間後にはスブラッグ夫妻に引きさかれ、エルマーはアラスカへと去った。自分自身、義父の土地を元手に成り上がったアブナーは、物質主義の娘が生きのびる最適な環境を承知しているからこそ、当時無一文のエルマーにアンディーンを託すことは不可能だと判断したにちがいない。父娘がこの事件の一年後にニューヨークへ移住したのは、エルマーがアベックスにやって来たのと同様、新しい環境での「適者生存」本能に駆られたためである。

## 2-2 アンディーンとラルフの結婚

### (1) 婚約・結婚を手助けするエルマー

アベックス時代から、アンディーンが新聞で注目していたのは、19世紀後半のアメリカで巨万の富を得た資本家たちの、つまり、社会進化論的勝者たちの、想像を絶する豪華な生活であった。『お国の慣習』では、大銀行家の子息ピーター・ヴァン・デジェン (Peter Van Degen) がその代表であり、後にエルマーも鉄道王となって、その仲間入りをする事となる。他方、植民地時代からのニューヨーク支配階級に属する人物の代表として描かれるのが、ラルフ・マーヴェルである。ラルフは、「社交欄の魔法の輪の外の人生をすべて陳腐で無益に思わせるほど最高なるものの象徴」(49-50) とアンディーンが表現するピーターでさえ、「包囲はしても中に入れない社交界の実力者グループ」(29) の中核にいる人物で、その社会的地位と、伝統的家柄を象徴する端正な外見でアンディーンを惹きつけた。彼女にとって最大の誤算は、「社交界の実力者グループ」は、「祖先、規則、因習」(161-2) を守って生きるのを信条とし、奢侈生活を享受する新興勢力とは対極的に、大金を所有しておらず、むしろ、あからさまな拝金主義に批判的で、質実な生活を営んでいることだった。この意味では、

華美な物質主義が席卷しつつあった19世紀後半アメリカ社会において、すでに淘汰されつつある側に立つ人々であるといつてよい。

ラルフもアンディーンの美しさに夢中になったのは当然として、結婚を決意したのは、彼女が「その初々しさと適応性」(82) ゆえに、「安っぽい上流層に成り上がる運命」(同)にあるのを危惧したから、つまり、軽率なアンディーンが、ピーターに代表されるようなニューヨークの新興成金の妻となることを阻止しなかったからだ。ラルフのこの判断にみられるのは、排他的で、自分の文化を絶対視する狭量な支配層の偏見である。他方、ラルフは社会の大きな変化に対応できず、古い価値観に束縛されて生きる祖父と母親を「侵入者の前進に伴って急速に絶滅の運命にある、アメリカ大陸の消え行く住人」(73-4)として、「アポリジニ」(73)にたとえている。つまり、ラルフは「追いはぎ貴族」たちが力をつけつつあるアメリカ社会の現状を憂い、彼らの物質主義的生き方に批判的であると同時に、新しい価値観や生活様式に背を向ける祖父や母親が(そして自分が)、早晚時代にとり残されることを、冷静に客観的に予測している。まさに社会進化論が跋扈していたこの作品の舞台と時代背景を考えれば、ラルフの予測は、当を得ている。しかし、ラルフの最大の問題点は、自分の生まれ育った社会・文化を絶対視するあまり、アンディーンと、彼女が憧れる「安っぽい上流層」とを蔑視し、差別する視点を捨てることができなかったことである。時代の流れを観念的に理解はしていても、感情的には受け入れられなかった、ラルフ自身の弱さとも言えよう。18世紀にイギリスの植民統治のもとで生活圏を奪われ、迫害されたオーストラリア大陸の先住民アポリジニの運命は、19世紀末のアメリカ社会を席卷した新興勢力に屈した、ニューヨーク上流階級に属するラルフ自身の運命を象徴しているのである。

自ら絶滅に近いと予測する社会・文化ではありながら、結婚によってアンディーンをそこに適応させようとするラルフと、上流社会への外面的な憧れだけから、彼女の奢侈生活を支えるために必要不可欠な資力を持たないラルフの妻になろうとするアンディーンとの、破綻が容易に予測される結婚に反対したのは、現実主義のアプナーである。にもかかわらず、エルマーの存在が、二人の

結婚を実現させたばかりか、予定より早めすらしたのである。つまり、アンディーンの結婚を事実上操作したのは、エルマーなのだ。

ニューヨークで思いがけなく再会したエルマーの「身ざれいにしている」(59)外見から、アプナーは、彼の社会進化の第一歩を嗅ぎとる。その存在に怯えたため、娘の無理な要求を聞き入れ入手したオペラのボックス席で、アンディーンは、ラルフの訪問を受け、二ヶ月後の婚約にこぎつける。婚約発表直後に出かけたオペラで、アンディーンを怯えさせたのは、「大粒の模造真珠」(101)を身につけたエルマーとの思いがけぬ再会であった。ネブラスカで別れて以来、モファットが社会的に進化しつつあるのは明白であった。エルマーとの結婚と離婚という、過去の汚点をマーヴェル家に知られまいとの策略が、結果としてアンディーンにラルフとの結婚を早める決意を促した。投機に失敗し、手持ち金を欠いていたにもかかわらず、アプナーが挙式予定日の変更を承諾することになったのも、娘とエルマーの再会報告に覚えた恐怖心からであり、莫大な結婚資金も、かつての仕事仲間の情報をエルマーに要求され、心ならずも教えることで、見返り金として辛くも手にしたのであった。このように、アンディーンとラルフの結婚に至る過程を追ってみると、エルマーの存在が、二人の結婚を操作し可能としたのはまちがいない。

## (2) 不幸な結婚生活と洩れ聞こえるエルマーの噂

アンディーンにとってラルフとの結婚は、エルマーとの離婚歴隠蔽工作にすぎず、最初から愛情など存在してはいない。新婚旅行中のパリで夫に内緒でデザイン変更したマーヴェル家伝来の貴金属は、その象徴といえよう。ニューヨーク上流社会で注目と賞賛を集めるためだけの道具として、ラルフ・マーヴェルの妻、という看板を掲げるアンディーンには、新婚旅行の最後に判明した妊娠も、自分の美しさを損ない、楽しみを奪う苦痛でしかない。ウォートンは、ラルフとアンディーンの婚姻が破局へ向かう大きな転機を、息子ポールの二歳の誕生日に用意するが、それに絡ませるように、ラルフの魅力低下と、エルマーの魅力上昇を並行して描くのを忘れない。

「排他的で流行後れの人々に身をまかせてしまった」(193)自分を嘆くアン

ディーンの耳に入ったのは、上向きの人生路線を歩みはじめた「半ば嘲笑された、だがすでに手ごわく、気まぐれな金銭上の影響力をもつ」(197) エルマーの噂である。「金儲けに熱心で、野卑な人の集団でも一人きわだつ」(215) 存在として、ニューヨーク社交界でも注目を浴びるようになっていたエルマーの、かつて秘書として仕えていた新興成金ハーモン・B・ドリスコール (Harmon B. Driscoll) と熾烈なビジネスのシーソーゲームを展開している様子が、示唆される。まさに喰うか喰われるか、の両者の死闘は、作品の終わりまで続き、社会生活上での「適者生存」の厳しさを物語る。エルマーが投機に失敗したとの噂がアンディーンの耳に入るときは、必ず反比例するように、彼女が社交界において精彩を放っている場面が描かれる。逆に、アンディーンが少ないラルフの収入を超えた散財で苦境に陥ったときには、投機に成功したエルマーの、意気軒昂で上流社会に現れる姿が描かれるのである。ラルフとアンディーンの間婚生活の不和を描きながら、社会進化を遂げつつあるエルマーの様子を添える、巧みに計算した手法は、エルマーがアンディーンの運命に絡む重要人物であることを示すためといえよう。

### (3) ラルフとの別居を手助けするエルマー

ニューヨーク上流社会にラルフの妻として食いこんで以来、アンディーンが狙いを定めてきた男性は、ラルフのいとこの夫、ピーターである。エルマー同様、社会進化論的勝者の典型ともいえるピーターを、ウォートンは容赦ないほど醜い外見に設定する。拝金主義にまみれた身勝手な「追いはぎ貴族」の内面の醜さが、外面にもそのまま映しだされているとも言わんばかりである。初対面のとき、「トカゲに似た」「奇妙な逆三角形の顔」(49) でアンディーンを不快にしたピーターに対する肉体的嫌悪感は、作品最後まで消えることはないのだが、後の二人の逃避行中、「二人はあちこちに行って、多くのお金を使い、さらにもっとお金を使った。人生で初めて彼女は望むすべてを買うことができた」(365) ほどの、彼の莫大な財力は、アンディーンの心を捉えてはなさない。長男の誕生日パーティを忘れ、ピーターと二人きりでいた事実を、ラルフに悟られた時点で、マーヴェル夫妻の結婚生活は事実上、終わりを迎える。私的醜聞

をなにより嫌うラルフが、内向的気質をさらに深め、一人苦悩するのに対し、獲物を狙うアンディーンの傍若無人な行動は激化する。ピーターがパリに向け出航すると知ったアンディーンは、父親にパリ行きの費用を無心する厚顔さは、社会的進化を遂げるためには手段を選ばなかった「追いはぎ貴族」そのものだ。だが、この時、投機に失敗していた父親も、エルマーも、資金がなく、彼女の企みは実現しそうにない。

しかし、この局面でも、エルマーがラルフに働きかけて、彼の勤務する不動産代理店から貴重な情報を入手し、結果として、ラルフに報酬として渡った大金が、アンディーンは望むパリ行きを可能にした。アンディーンはどのような苦境におかれても、生きのびる力を備えており、したたかに「適者生存」を地で行く。この状況をラルフの側から判断すると、妻に単独のパリ行きを許したことが、その時点で悩んでいた婚姻生活における精神的苦痛からの解放であると同時に、経済的負担、妻の不在に対する精神的不安・肉体的不満といった、新たな苦悩の始まりともなるわけであり、まさに、マーヴェル夫妻へのエルマーの介入は功罪半している。

#### (4) ラルフの自殺

パリでの单身生活を享受するアンディーンが、アメリカに残してきた夫と息子の存在すら眼中にないのに対して、妻からの音信不通と経済的負担は、ラルフを精神不調に追いやる。一ヶ月間ほとんど意識もなく寝こんだ後、やっと回復したラルフに、半年後、「妻子不法遺棄」の訴状つきで離婚申請書が届く。ピーターとの再婚を画策してサウスダコタ州に滞在中の、妻の仕業であった。夫の重病すら踏み台にして、さらなる社会進化を遂げようとする、すさまじいほどのアンディーンはやり方は、世間を味方につける計算をした巧妙なものであり、彼女は、仕事に夢中な夫が家庭を幸せにできなかったとの理由を捏造して、離婚申請をしたのである。

アンディーンは誤算は、夫ラルフが属する「異文化社会」では、「離婚訴訟を、自分の秘密を世間に覗かせる下品で不必要な方法と見なしている」(322)点であった。ラルフ自身、そして彼の祖父、母親、姉、いとこを含む全員が、一族

のだれにもかつて起こったことのない、このような「醜聞」(336)に対しては、その存在を無視するという現実逃避的対処法しかとれない。したがって、二人の離婚は決定されないまま、時が過ぎる。しかし、未経験の事態に直面し、依存すべき第三者を巧みに見だし、果敢に挑んで打開策を模索するアンディーンの逞しさを持たないラルフが、「自然淘汰」されていくのに、多くの時間はかからない。ラルフの治癒後二年のうちに、アンディーンは頓挫したピーターとの結婚をあきらめ、父親の命令を無視して、ピーターにもらった高価なネックレスを密かに売却し、それを資金に再度ヨーロッパに渡り、今度はラルフとの「婚姻の無効」を訴えて、新たに出会ったシェルとの再婚を計画する。ラルフが芸術作品創作に病後の精神的逃げ道を求め、無為に時間を過ごす間に、アンディーンは後ろ盾のない孤独な環境にいて、しかし、生きぬくための孤軍奮闘を続ける。この現実的な努力を惜しまない点においては、ラルフよりアンディーンへの共感が得られるのではないだろうか。

ウォートンは作品の展開上、ここでもアンディーンの運命にエルマーを絡ませる。パリでの生活費が底をつきかけたとき、彼女は偶然、エルマーと再会するのだ。このとき彼自身は投機に失敗しており、アンディーンに資金援助することが不可能なのだが、思わぬヒントを彼女に与える。彼女に与えられていたポールの親権を主張し、彼を手元に呼びよせ、養育費をマーヴェル家に請求して「しっかり腰をすえて彼らの小切手を待つ」(418)ようにとのエルマーの忠告は、しかし、息子になんの愛情も感じていないアンディーンによって、彼の親権をマーヴェル家に「相当な対価」(448)で譲るという、事実上の金儲けの手段として利用されてしまう。

なによりポールを愛するラルフにとって、この申し出は、どのような手段を講じてでも受けなければならないものである。ここに至って、彼にはいかなる現実逃避も許されない。期限つきで大金を用意することのできないラルフが、最後の頼みとしたのが相場師エルマーであった。ラルフ・マーヴェル夫妻が、期せずしてそれぞれ頼ったのがエルマーであるという展開は、ウォートンが彼の存在を作品の軸としていることを示している。ラルフが一族からかき集めた

資金を、エルマーはアベックス市への投機に充てるものの、その結果がラルフに大金をもたらすのは、皮肉なことに、彼の死後であった。

投機が願った結果を即生まないことに不安を覚え、自分が大金を緊急に必要なとする理由をエルマーに告白したラルフは、エルマーがかつて自分の妻の夫であったことを知らされるのである。アンディーンが巧みにつき続けた嘘をみぬげず、結果として彼女の嘘に加担したエルマーの処世術にも欺かれたラルフが、自分は「中世の甲冑に身を包んだ現代人のように、遺伝的に受け継いだ偏見につまづきながら歩きまわっているよう」(469)だと感じ、「彼の慣習や道徳的拘束力といった、旧態依然としたすべての構造が、彼のまわりで崩壊してしまった」(同)と自覚したとき、社会進化論的生き方に対する完全な負けを彼は認めたのだといえよう。そのため、ラルフに残された道は自殺しかなかったのである。

ラルフの自死は、離婚を求め別居中であったアンディーンに、多少の心痛は与えたとしても、むしろ、「彼の死が彼女を解放し、欲するものを彼女に与えてくれた。」(487)愛していなかったとはいえ、夫の死すらも「上昇の別なる段階に到達」(431)するための手段として利用するアンディーンの逞しさは、熾烈な「適者生存」競争に勝利する者だけがもつ凄みすら感じさせる。

### 2-3 アンディーンとレイモンの結婚

アンディーンがフランス貴族レイモン・ドゥ・シェルと初めて会ったのは、パリでの単身生活を享受し、ピーターとの結婚を画策している最中で、むしろ、ピーターに嫉妬させる手段として、この顔立ちの整った貴族を利用したのであった。だが、レイモンとのつきあいは、「彼女の生活を平凡に思わせる」(286)ような、「別のもっとすばらしい存在」(285)に彼女を開眼させてしまう。この時点でのパリ滞在は、エルマーからラルフが得た大金で実現したことを考えると、間接的とはいえ、エルマーが、アンディーンを次なる社会進化へと誘動した、とも考えられるのではないか。

次にアンディーンがシェルと再会するのは、ピーターとの逃避行に失敗し、



傷心で単身パリへ戻ってからである。シェルを自分の美貌で惹きつけることに成功はしたものの、アンディーンは「地位ある男性が離婚した女性と民事結婚の形態をとる」(402)より、むしろ愛人関係でいる方が望ましい、というフランス社交界の常識を知って驚く。ピーターとの逃避行が失敗に終わった苦い経験を同様にくりかえさない、と学んだ点で、アンディーンには「適者生存」の資格があろう。離婚係争中であるため、ラルフ・マーヴェルの妻という看板も失っていた彼女は、パリの社交界で苦渋の日々を余儀なくされていた。だから今度こそ、シェルの妻の座を獲得しなければならない。シェルとの法律上の婚姻関係を熱望する彼女のとった秘策は、離婚を認めないフランスカトリック教会に対して、ラルフとの「婚姻の無効」(407)を訴えることであった。社会進化のために法を曲げることも辞さないアンディーンの執念は、いかなる手段を用いても利潤を求める資本家のそれと同じである。

彼女の前に立ちはだかるフランス社交界の壁を崩壊させたのは、直接的には、ラルフの自死によって彼女自身が、「再婚のために教会の許可をえようと奮闘する離婚女性ではなく、…合法的な切望の対象とされる未亡人」(483)となったからである。だが、ラルフの自死を招いたのは、エルマーがラルフに語ったアンディーンの不婚が原因であったのだから、ここでも彼女を間接的に救ったのは、エルマーであることに注目しなければならない。

ところが、「伯爵夫人の宝冠をつけ、有名な城と、彼女を崇拜する美男子で人気のある夫」(489)をもつ新生活が、アンディーンにとって、「自分を彼らの排他的組織に閉じこめる、伝統や因習や禁止といった不思議な蜘蛛の巣」(516)と同義になるのに、さして時間はかからない。ニューヨーク上流社会のマーヴェル家同様、フランス貴族のシェル侯爵家にも、アンディーンの奢侈生活を許容する現金がないためである。自文化こそが絶対的な価値であるとの、シェル一族の独断と偏見は、ほとんど歴史もないアメリカ出身の、拝金主義で即物的なアンディーンへの蔑視と嫌悪となり、他方、アンディーンも、ことごとく一族の生活信条に反抗する愚を重ねる。彼女が自分の物欲を満たすために、「アメリカであれば、保管しておく余裕のないものを売却するのは、恥ずかし

いことではない」(527)との理由を添えて、シェル家が所有する歴代の芸術品を換金するようレイモンに提案した時点で、事実上、二人の結婚生活は終わりを迎える。レイモンを育てた文化や社会に対する無理解から、アンディーンは一族の精神を疲弊させ、ついにシェル家との人間関係は破綻を来したのであった。

パリから離れた城での、精神的、物理的閉塞状況から、アンディーンを救出するのは、やはりエルマーである。今やアメリカの鉄道王で、「ロッキー山脈以東で最も裕福な六人中の一人」(586)となった彼は、金に糸目をつけない美術品収集家として彼女の城を偶然訪問し、その財力でかつての妻を魅了する。それぞれにアメリカ社会進化論的生き方をしてきたアンディーンとエルマーの人生が、再びぴったりと重なるうとしていた。

## 2-4 アンディーンとエルマーの再婚

アンディーンが勝手に古美術商に依頼した、ルイ15世より下賜のブシエによるタペストリーは、ウォートンが作品最後に用意した、伝統勢力を駆逐する新興勢力の富の象徴である。アンディーンは、シェル家の伝統に挑む目的で、二つの暖炉に薪をくべ、高級なお菓子を添えて午後のお茶会をする場所として、この大傑作の飾られた画廊を選ぶ。ただ、シェルの母親が、この浪費を無言の抵抗によって非難し、アンディーンの孤立感がさらに高まった点において、まだタペストリーは伝統勢力の側にあった。しかし、あれほど家宝を売却することに抵抗していたレイモンが、後に、窮乏生活のため、この家宝を手放すことを余儀なくされた時点で、タペストリーは新興勢力の勝利の象徴となる。しかも「モファット氏か、彼の代理人バイヤー以外であれば、だれにでも」(592)売るとレイモンが言ったという、その実物が、「金めっきの大画板にはめられて」(587)モファット夫妻のパリの新大邸宅を飾ったのだ。このタペストリーは、モファット夫妻にとって、財力の象徴であり、レイモンを負かした残忍な喜びを具現するものでもある。他方、シェル家の人々にとっては、伝統と歴史が物語る家族の思い出そのものである点において、それを手放すことの精神的痛み

ははかりしれない。回復不能なほどに人の心を傷つける、鈍感にしておぞましい新興勢力の財力を、このタペストリーは無言で示しているのである。

アンディーンは、進んでレイモンとの結婚生活に幕をおろしたのではない。ただ、彼との結婚によって得た「肩書きや地位や持ち物」(536-7)も、大資本家となったエルマーが所有する資産の前には、彼女の自尊心を震ませてしまった。そこでアンディーンは甘言で釣って、エルマーに愛人関係で妥協させようとする。かつて愛人としての自分を許さず、一度目はラルフの重病に乗じてでも、ピーターの妻の座を得ようと奔走したとき、二度目は恣意的な解釈で法を悪用してでも、レイモンの妻の座を得ようと画策したとき、と比較してみると、今回のアンディーンの環境への適応ぶりはおぞましいほどだが、これまでどのような窮状にいても自分を救ってくれたエルマーへの甘えと過信、とも考えられよう。しかし、ウォートンが最後に勝者に選んだのは、エルマーであった。彼は「もし君がもう一度僕のものになるとしたら、そういうふうな関係ではいやなのだよ」(571)と拒絶し、二兎を追うアンディーンは一兎をも得ず、と思いを知らせたのである。

アンディーンがエルマーとともに帰国して以降、ネバダ州法廷での離婚裁判を経てモファット夫人となり、五番街の豪邸で新婚生活を送り、翌春のイースターにパリへ戻った経緯が、新聞記事を挿入する形で、簡潔に述べられる。真摯に熟慮を重ねる経験などかつてなく、欲望のまま豪華な生活を送るモファット夫妻の、華美であたらしい享樂的生活を描くのに、これほど適した文章構成はない。ウォートンは、『お国の慣習』の最終章46章を書くに際して、テンポの速い、感情説明を徹底的に排した文章を意識したのではないか。特に、シェル家の城で、時が悠然と、毎日変化なく過ぎていく様子を描いた、前章までの長文との対比は鮮やかである。

北大西洋をはさんだ二つの狭量な社交界が、モファット夫妻それぞれの、10年間の激しい変遷を受け入れるのすら、実はさほど困難を伴わなかった。「人々に忘れたふりをする時間を与える必要があっただけのことである。すでに彼らはみな、見事にふりをしてくれていた。」(590)時代が社会進化を受け入れて

いた。伝統や因習に縛られた旧弊な世界に閉じこもって生きる時代の終焉は、作品最後でモファット家の晚餐会に集う人々のリストに象徴されよう。ただ、夫妻が実践してきた「適者生存」的生き方は、まさに変化の連続を強要する厳しいものであり、四度目の結婚で、渴望してきた富をやっと手にしたアンディーンが、次は大使の妻の座を羨望する様子を描いて作品は終わる。彼女が、おそらくこの後も、決して満足を覚えることなく、終わりなき欲望のまま、がむしゃらに人生を駆け続けるであろうことは想像にかたくない。彼女の生き残りを賭けた競争に、ゴールはないのだから。

### おわりに

『お国の慣習』は、美貌を元手に、結婚制度を意のまま利用して、社会進化論的生き方をする逞しい女性アンディーン・スプラッグの物語でありながら、彼女が望むものを次々と獲得した陰には、同じ社会進化論的生き方によって、実業家としての「アメリカの夢」を実現させたエルマー・モファットの、大きな力が存在したことを、彼女の四度の結婚と三度の離婚を通して明らかにしてきた。この二人は、作品が始まった時点では、すでに離婚をした状態であり、紆余曲折を経て、最後に再び結婚するのだが、それぞれの生き方をたどれば、この結末は、むしろごく当然の帰結であった。

両親であれ、夫であれ、息子であれ、躊躇せず犠牲にするアンディーンも、熾烈な競争を制して、社会の底辺から頂点へと上りつめるエルマーも、アメリカ社会進化論的生き方の実践者であった。しかし、この二人のように「適者生存」競争に勝利する者がいるならば、同時にそれは、敗北する者もいることを意味するのであり、この作品での後者は、さしずめ、ラルフ・マーヴェルであり、レイモン・ドゥ・シェルであった。また、幼いながら、すでに二人の父親同様の苦悩を抱えるポールも、遠からず同じ運命をたどるであろう。1870年代からの、激動するアメリカ社会を「適者生存」競争の場ととらえ、勝者と敗者が交錯する様を描いたのが、まさに『お国の慣習』であったのだ。

しかし、熾烈な闘いを制しながら、作品最後でなお、自己満足できないアンディーンを描いたのは、アメリカ社会進化論の生き方が、決して人を幸福にするものではない、とウォートンが確信していたからではないだろうか。自分が求めるものを獲得するために、あらゆる機会を捉えていくアンディーンの活力には感心するが、自己中心的で、無責任で、即物的すぎるその生き方は、むしろ批判的に読まれよう。

その点で、読者がより共感を抱けるように描かれているのは、エルマーである。ウォートンは、彼が、アンディーンの一人息子ポールと関わる場面を作品中三度、描いている。いずれも、生き馬の目を抜くウォール街において、利己的、日和見的で、独立独行の人生を歩むエルマーが、心暖まる、柔らかな人間性をふと見せる場面である。単身でパリ行きを実行する直前、打算的行動から、あるべき「母親」像を演じるアンディーンが抱いたポールと偶然出会った一度目、親権をもちながらポールをパリに伴っていないアンディーンに、幼子のためすぐさま呼びよせるよう忠告した二度目、ポールの継父となり、まったく実子に関心を示さない妻アンディーンを諫めようとした三度目、これらのどの場面においても、不器用だが、思いやりのあるエルマーの言動は、対比的にアンディーンの無情なまでの冷淡さを浮かびあがらせる。エルマーの態度は、それが仮相空間であれ、「家庭」に、心の癒しと平安を求めるほど、日々の闘いが熾烈であることの裏返しともいえよう。他方、我が子に対する彼の関心を利用するか、無視するか、アンディーンの人間的対応には、徹底した「適者生存」的生き方そのものへの、ウォートンの批判がこめられているのである。

## 引用文献

Bender, Bert. *Evolution and "the Sex Problem": American Narratives during the Eclipse of Darwinism*. Kent, Ohio: The Kent State University Press, 2004.

Browne, Janet. *Darwin's Origin of Species: A Biography*. New York: Grove Press, 2006.

- Carroll, Joseph. *Literary Darwinism: Evolution, Human Nature, and Literature*. New York: Routledge, 2004.
- Galbraith, John Kenneth. *The Affluent Society*. 1958. Boston: Houghton Mifflin Company, 1998.
- Hofstadter, Richard. *Social Darwinism in American Thought*. 1944. Boston: Beacon, 1992.
- Ohler, Paul J. *Edith Wharton's "Evolutionary Conception": Darwinian Allegory in Her Major Novels*. New York: Routledge, 2006.
- Wharton, Edith. *The Custom of the Country*. 1913. New York: Scribner's, 1941.